


# 実験展示を記録する

# 実験展示の実施記録

中村 ひろ子

今回の展示がどのような論議を経てたどり着いた展示構想に基づくものであったかについては前章に詳しい。本章ではこの展示構想をどのように展示という形で提示できたかについて報告する。展示を企てる側は展示に託したメッセージを観覧者に届けるためにさまざまな手法や装置を仕掛ける。しかし、実施された展示は予算をはじめとする時間、展示空間、資料といった制約に照らして、それまで論議を重ねてたどり着いた展示構想案に修正を重ねた結果であるといえよう。また、テーマやメッセージといった目に見えないものを目に見えるものにしていく作業は、構想段階とは別の意味で共同作業である。展示場の設計者、デザイナーから映像製作者、照明や展示装置の施工者などさまざまな人々が展示を作り上げていく。Ⅰではこの実施した展示の記録を資料編として編んだ図、写真などのデータとともに報告する。

また、展示は観覧者が展示空間に立つことによって初めて成り立つものである。Ⅱではこの展示の観覧者と、その観覧者からアンケートの形で届けられた展示へのメッセージを、展示評価とそれを受けての修正についてとともに報告する。

## I 展示の記録

### I-1 開催要項

下記開催要項に従って展示を実施した。

- 1、展示の名称 「あるく—身体の記憶—」
- 2、主催 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化のための非文字資料の体系化」研究推進会議

### 3、展示期間

<前期> 2007年11月1日（土）～30日（金）

10：30～16：30

ただし、11月3・4日を除く日曜・祭日は休室

<後期> 2008年2月23日（土）・24日（日）

10：00～18：00

※23日（土）・24日（日）は国際シンポジウム開催日。

### 4、展示会場

神奈川大学日本常民文化研究所参考室

### 5、入場料 無料

### 6、展示の趣旨

COEの研究課題である図像、身体技法、環境・景観の体系化という成果を展示という形で社会に還元し、非文字資料という新たな研究領域の持つ可能性を研究者だけでなく、広く市民に向けても発信する。

また、発信にあたっては展示制作途中の市民による評価の導入など市民が参加して展示を作り上げる展示手法や展示が持つ視覚、聴覚、あるいは言語といったさまざまなバリアを超える展示手法など展示に「実験」を試みる。

### 7、展示のねらいと構成

<ねらい>

人類の基本的行為である「歩く」をテーマとした展示や体験を通して観覧者がそれぞれの身体に記憶されている「歩く」という身体技法に気づき、非文字資料がもつ豊かな世界に出会う。

<展示構成>

- A「あるく回廊」 B「あるく人生」  
C「かつてのあるき方を探る」  
D「脚の人生」 E「あるくに触わる」

F「はきかえて歩いてみよう」

## 8、印刷物

①ポスター ②案内葉書 ③リーフレット

### I-2 展示構成と展示資料

展示を次のように構成した。展示構成のそれぞれに込めたメッセージについては前章で既に記した。ここでは図、写真などのデータを中心に報告する。( ) 内に対応する資料編の図版No.を示した。

#### (1) 導入

展示場のある建物2階入口の階段脇に展示案内板(3-1-1)を設置し、そこから展示場入口まで床面に「足跡」(3-1-2)を貼ることで誘導する。階段を上がった正面には「現代人の歩く姿の写真コラージュ」(3-1-3)バナーを設置しテーマである「あるく」をイメージさせた。また、大学入口正面の壁面には垂れ幕を下げて展示開催を表示した。構想では展示場のある壁面に足跡を貼る案であったが、実施が困難となり垂れ幕とした。

#### (2) 展示場入口

足跡をたどって行き着いた展示場入口には「開催挨拶」(3-1-4)と開催趣旨を記した『「あるく—身体」の記憶—』の実験」パネル(3-1-5)を配した。

#### (3) テーマA「あるく回廊」(3-1-6)

紗膜に囲まれた回廊は、映像「身体」の記憶の発見」によりまず「かつてのあるき方」を示し、後半は映像とインストラクターに導かれて観覧者が実際に「歩く」を試みる空間として設置したが、同時に、観覧者が体験後は紗幕を通して映し出される他者の歩きを見る側に立つことを想定してのものでもあった。

#### (4) テーマB 「あるく人生」(3-1-7)

「熊野観心十界図」(円福寺蔵)上半部に描かれた出生から死に至る各世代の歩く姿を「あるく人生」として提示した。構想ではあるき初めの儀礼などを通し人生のあゆみを展示する案であったが、このテーマを「熊野観心十界図」を通して伝えることに変更した。

#### (5) テーマC「かつてのあるき方を探る」

(3-1-10.11.12)

ケース内に収めたかつてのあるき方を描いた図像

資料と3枚の解説バナーにより、かつてのあるき方を探る試みを提示した。

#### ①ケース1

実物資料 『絵巻物による日本常民生活絵引』原画「伴大納言絵詞」 『絵巻物による日本常民生活絵引』原画「石山寺縁起」 『東海道名所図会』

#### ②ケース2

実物資料 『絵巻物による日本常民生活絵引』原画「親鸞聖人絵伝」 『絵巻物による日本常民生活絵引』原画「伴大納言絵詞」 『日本山海名物図会』

#### ③ケース3

実物資料 『風俗画報21号』『風俗画報54号』「JAPAN 1904」

#### (6) テーマD「脚の人生」(3-1-8)

全編歩く姿を描いた映画「脚の人生」(マツダ映画社所蔵、芸術映画社製作、昭和10年前後製作と推定)を常時上映した。構想案にはなかったが、この映画「脚の人生」の存在を知り、新たに設けたテーマである。

#### (7) テーマE「あるくに触わる」(3-1-9)

人形を使ってかつてのあるき方と思われる三つのあるき方のフォームを復元し、点字によるキャプションを添付し、自由にフォームを変えられる人形とあわせ、触れる展示とした。

#### (8)「はきかえて歩いてみよう」

最後に履物を用意し、日常履く機会の少ない履物を履く楽しさを通して履物の違いによる歩き方の変化を体験するコーナーとした。用意した履物は男性のハイヒール体験用の大きなサイズのハイヒール(25.5・26・26.5・27cm)、地下足袋、雨下駄、男物下駄、ぽっくり、一本歯下駄、ワラズウリである。

### I-3 インストラクターの存在

以上の展示構成にあってインストラクターの存在は欠かせない。展示と観覧者を結ぶだけでなく、特に「あるく回廊」では「あるき」を再現して見せる行動展示、すなわち一種の展示を構成する存在である。常時2名(内1名は神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科学生)を「あるく回廊」と「はきかえ

て歩いてみよう」に配置した。インストラクターに託したのは

- ①観覧者が「あるく」を試みることに誘いと共に歩くこと。
- ②プログラムに組んだ歩き方を模範的に演じてみせること。このため、開館前の1日を「あるき」の習得に当てた。
- ③履物を履き替えることへの誘い。
- ④観覧者の反応や声の収集記録。  
「インストラクター日誌」に見聞きした観覧者の反応や声を記録すること。

## I-4 印刷物

### (1) ポスター (A2版) (3-2-1)

本展示のテーマ「かつての歩き方」をイメージした近世の図像をデザインした。全国の大学や博物館の他、地元の町内会を介して町内の掲示板や最寄りの白楽駅、東神奈川駅構内にも掲示した。

### (2) 案内葉書 (3-2-2)

招待状に代えて案内葉書の形で広く配布した。

### (3) リーフレット (A3版 三つ折) (3-2-3.4)

ポスターのデザインを表紙に使用し、「かつてのあるき方を探る」に焦点を当て、本COEプログラムの紹介を含んだ形で作成した。

## I-5 展示の設計施工

展示設計は文化環境研究所（基本設計 原田豊・今井明）に、展示制作は乃村工藝社（制作管理 菊地陽一）に委託して実施した。

## II 観覧者・アンケート・展示評価

### II-1 観覧者

本展示はその趣旨に「非文字資料という新たな研究領域の持つ可能性を研究者だけでなく、広く市民に向けても発信する」と謳っており、研究者を含めさまざまな方々の来館を願った。しかし、常時展示場として公開されていない馴染みのない会場での1カ月間という期間での展示の周知は十分とはいえない

### 観覧者の傾向

神奈川区内	横浜市内	神奈川県内	県外	未記入	計
90名	158	86	102	173	609
15%	26	14	17	28	

神大生	神大教職	他大生	他大教職	その他	未記入	計
242名	67	6	17	138	139	609
44%	11	1	3	23	23	

かった。展示期間28日間の観覧者数はカウントしていないため正確な数は把握できていないが、芳名帳に記入された方々についてまとめたものが上記の表である。

当然のことではあるが本学の学生、教職員が過半数を占めており、広く社会へ発信ということからすれば不満足な結果であるが、大学所在地の神奈川区内の方や横浜市内といった地域の方々の来館が多かったことはCOEとしてというより大学としてその研究成果を地元に戻元できたこととして評価しておきたい。

### II-2 アンケート

展示への観覧者からの声を報告する。今回の展示にとって観覧者からの声は大変重要なものであった。仮説としてかつての歩き方を提示し問いかけた上で実際に歩いていただいた結果は、展示への評価であるだけでなく、この問いかけ、仮説への返信であると捉えていたからである。しかし、観覧者からの声を受信することは難しい。一つはアンケート用紙に記入をお願いするという形であるが、今回はアンケートといっても項目毎に回答の選択肢を設けるという方法はとらず、「展示をご覧になり、実際にお歩きになってお感じになったことがありましたら」というだけの呼びかけで年代、性別を問う形をとった。出来るだけ観覧や体験を終えてふと声になるものが聞きたかった。もう一つがインストラクターに託した観覧者の声を拾い記録する形である。体験をしながら、展示を見ながらの感想や質問、観覧者同士の会話などを耳にしたらノートに記録することを託した。この二つの形から返されてきたものを、幾つかを紹介する。

### <「あるく」というテーマについて>

- ・一番身近な「歩く」に観点を置くことで印象深い
- ・先人の歩きをこのように振り返る展示は新鮮
- ・日常のふとした行動に着眼したことは素晴らしい
- ・歩くに重点をおいた展示は、はじめてみた貴重な体験
- ・「あるく」はめずらしい捉え方で面白かった
- ・珍しい展示
- ・あるくに着目したことも、展示の仕方もとてもおもしろい

### <「かつてのあるき方」について>

- ・本当にこんな歩き方をしていたの
- ・歴史の中で形を変えて今まで続いてきたことに感銘
- ・普段考えることのなかった歩き方にもいろいろあると感じられた
- ・あるくという無意識な行為も記憶からきていると知り驚いた
- ・当たり前行動にも時代の流れによる変化があることが興味深い
- ・昔の歩き方がいかに違うかが体験によりわかった
- ・昔の歩きが今と違うことがわかったが、意識しないとわかりにくい
- ・時代により歩き方が変わることを初めて知った
- ・歩き方に歴史があることなど、初めて知ることが多かった
- ・膝を曲げ、腰を落とす歩きは日本人の体型、履物の影響か
- ・膝を曲げて歩く人は今もいるが、昔からの歩き方とは驚き
- ・なぜ変わったのか、軍制の導入か、目から鱗の内容
- ・戦時中木刀をかついで行進させられた時、多くの生徒が右足と右手を同時に出してしまい笑ったことを思い出した
- ・今の歩きはかなり西洋ナイズされ、あわただしくなっていると思えた
- ・日本人の歩くことの中に過去の記憶が入っているのは確か
- ・昔の歩き方はくらしに合った歩き方、現代は周囲

の目や常識による歩き方

- ・武道に通じる足の運びナンバ歩きを再確認した
- ・体験で歩き方に新しい発見ができた
- ・歩く体験がよかった
- ・貴重な映像をよく探してきた

### <展示手法などについて>

- ・足跡がおもしろく踏んで歩きたくなった
- ・入口の足跡から体験までおもしろい展示
- ・映像を真似て歩くのがおもしろい
- ・ふしぎな体験・体験できてよかった
- ・一本歯、ハイヒールを履いて男でよかったと思った
- ・履物の体験がおもしろかった
- ・小さいスペースだが濃密
- ・「歩く人生」の絵がライフサイクルを描いていて興味深い
- ・「脚の人生」という映画があるなど興味深い展示でおもしろかった
- ・デザインがおしゃれで見やすい

### <批判・注文>

- ・おもしろかったが、それで何を伝えたかったのかが不明
- ・記憶が継承されているのかについてはよくわからなかった
- ・まとめのようなものもほしかった
- ・自分の歩いている姿をみてみたい
- ・もっと長い距離を体験したい
- ・モデルは真似てるだけ、体全体で昔の日本人の再現をすべき
- ・自分の好きな歩き方をさせたほうがよい
- ・体験は楽しいが、見る資料ももう少し欲しい
- ・工学的説明が欲しい（体型・筋肉など）
- ・人体の構造からみた歩き方も考えて欲しい
- ・持ち物や服装、職業などが歩き方を規定しているのでは、その辺りも見なかった
- ・江戸時代なら階級による違いがあるのでは
- ・一本歯の説明がほしかった
- ・ギャラリートークがあったら
- ・人が多いと体験が困難
- ・結論がわからない
- ・昔の人っていつ頃



多くの方々が、歩きの体験を通して「あるく」ことを意識し、「あるく」ことを考えはじめた姿がうかがえる。「あるくはあまりに日常で意識していなかった」「意識していなかったあるくという動作がゆさぶられた」など「あるく」を意識化するきっかけにはなりえたかと思う。そして「歩くという当たり前のことが研究対象になることを認識」「これからは古い書物や絵を見るときに、どんな歩き方をしているかに気をつけたい」など、新たな資料の存在に出会ったとの声も聞くことができた。ただ、問いかけとして示したかつてのあるき方に多くの方が納得し、ときに変化の理由を跡付けてもいる。展示の持つ力について考えさせられた展示として提示されたものは見る者に結論・真実と理解されやすいことにもっと自覚的であるべきであった。

批判としてはあるき方を捉える視点の単純さが指摘された。階層、職業、服装や履物などあるき方を規定するさまざまな側面に今回はあえて触れずに描かれたあるきに絞ったための当然の指摘であった。また広報をもっとというご指摘が多く、毎日新聞に記事掲載後は「毎日新聞を見て」の来館者が多くみられた。今回は展示に対応した広報のあり方の検討が不十分であったのは確かである。

### 2-3 展示評価と展示の修正

当初「展示制作途中の市民による評価の導入」を謳い、展示構想案と展示実施案の各段階で評価を行

い修正しながら展示を作り上げていくことを計画していたが、時間的余裕を持てず、最後の展示実施段階のみの評価となった。村井良子氏に依頼し下記の通り実施した。その結果については本書の『『あるく—身体の記憶—』は実験展示でありえたか?』を参照されたい。

調査実施日：2007年11月19日(月) 15:00～17:00

調査方法①観察法

調査対象：実際の展示物・手法・環境、および観覧者の行動

調査方法②グループインタビュー

調査対象：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科学生

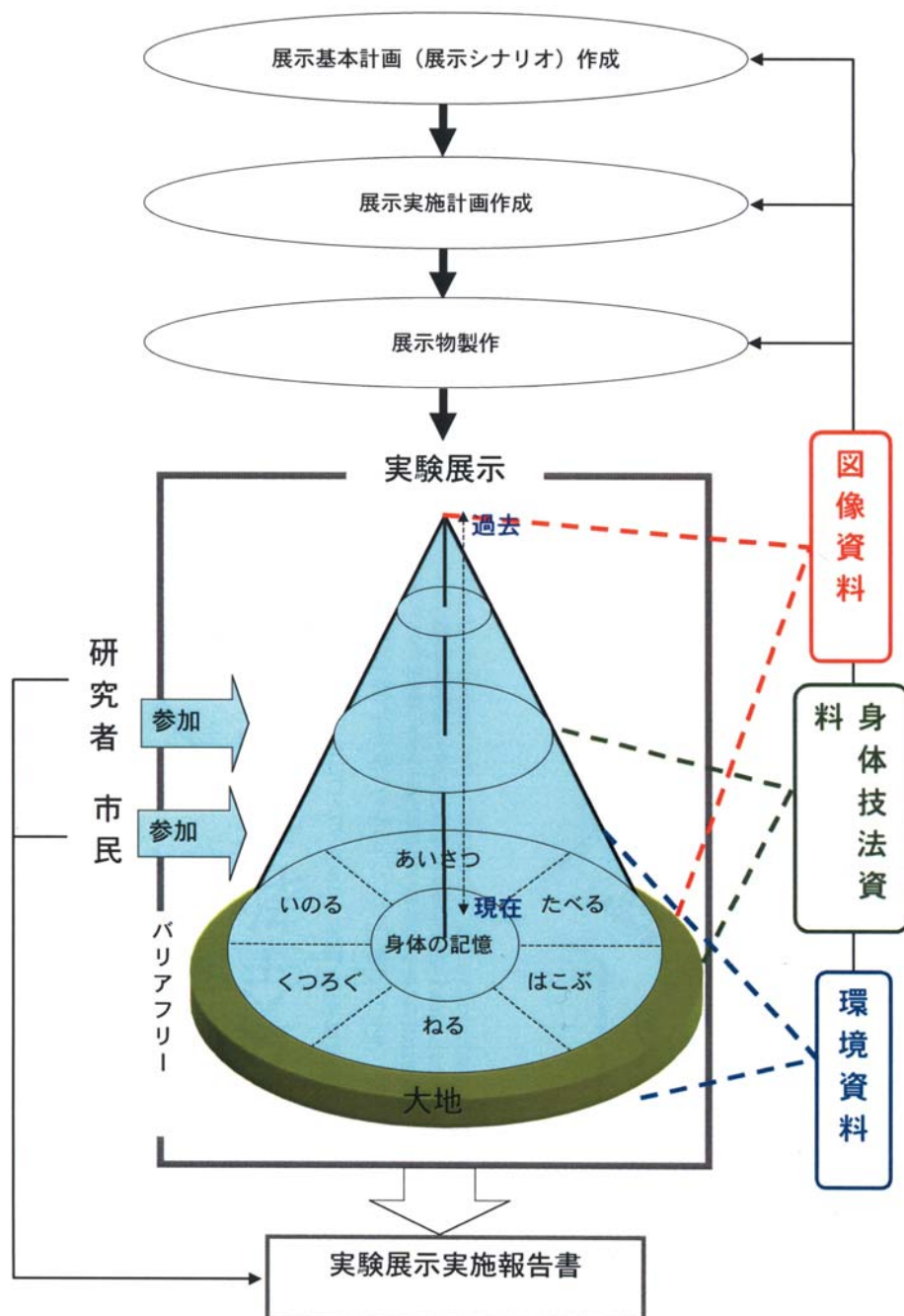
この評価とアンケートの結果をうけて展示の修正について論及していくが、後期開催の2月23日までに映像「身体の記憶の発見」に修正を加えた。一つは時間的に長いとの声を受けて体験のプログラムを一つ減らした。もう一つは観覧者への私たちの問いかけが、結論として受け止められたことへの反省から、最後のメッセージを「この展示で想定した、かつての私たちの歩き方は歩きやすかったですか。この感覚は私たちの「身体の記憶」につながっているかもしれない」と「想定」と記した上で問いかける形に変更した。もし当初の計画通り構想案、実施案の段階で途中評価をして修正できていたならとの思いを強くすることであった。

(なかむら・ひろこ)

# 1 展示構想

## 1-1 展示理念図

実験展示「身体の記憶－非文字の世界－」構想図



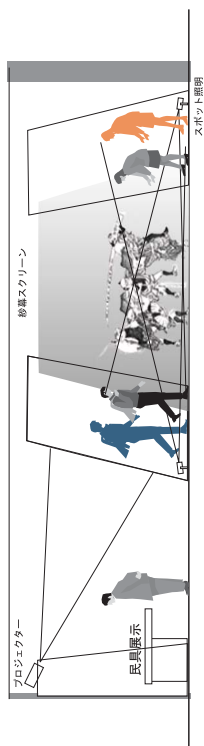
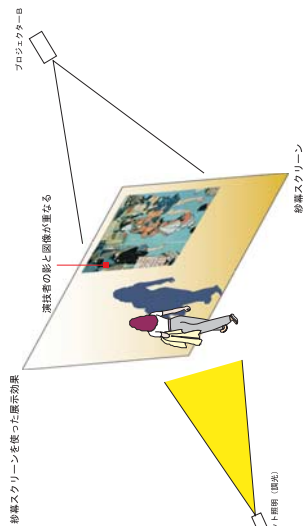
## 1-2 展示構想図



■学内広報表示  
東門から見えるインパクトのある表示。



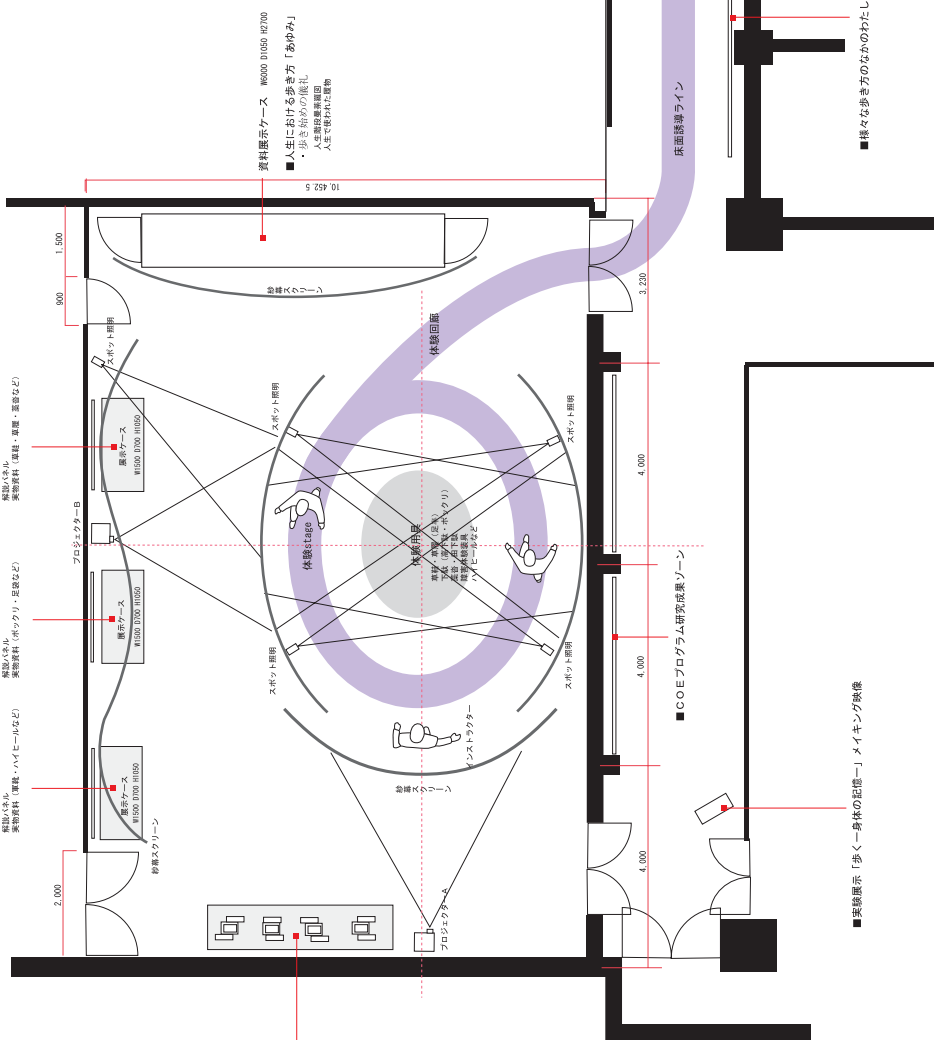
**誘導サイン**  
展示デターマ「あるく」を来館者に動機付ける誘導表示。  
バリアフリーへの対応も兼ねる。



■テーマ情報展示

体験メニューとなったテーマの情報を実物資料と解説パネルで紹介する。

- |                 |        |                  |
|-----------------|--------|------------------|
| 近代の歩き方          | 解説/バネル | 実物資料（軍靴、ハイヒールなど） |
| ・型として伝えられてきた歩き方 | 解説/バネル | 実物資料（ボックリ・足袋など）  |
| ・図像に見る近代以前の歩き方  | 解説/バネル | 実物資料（草鞋、草履・藁沓など） |



■実験展示「歩く—身体の記憶—」メイキング映像

## ■様々な歩き方のなかのわたしたちの歩き方「あるき」



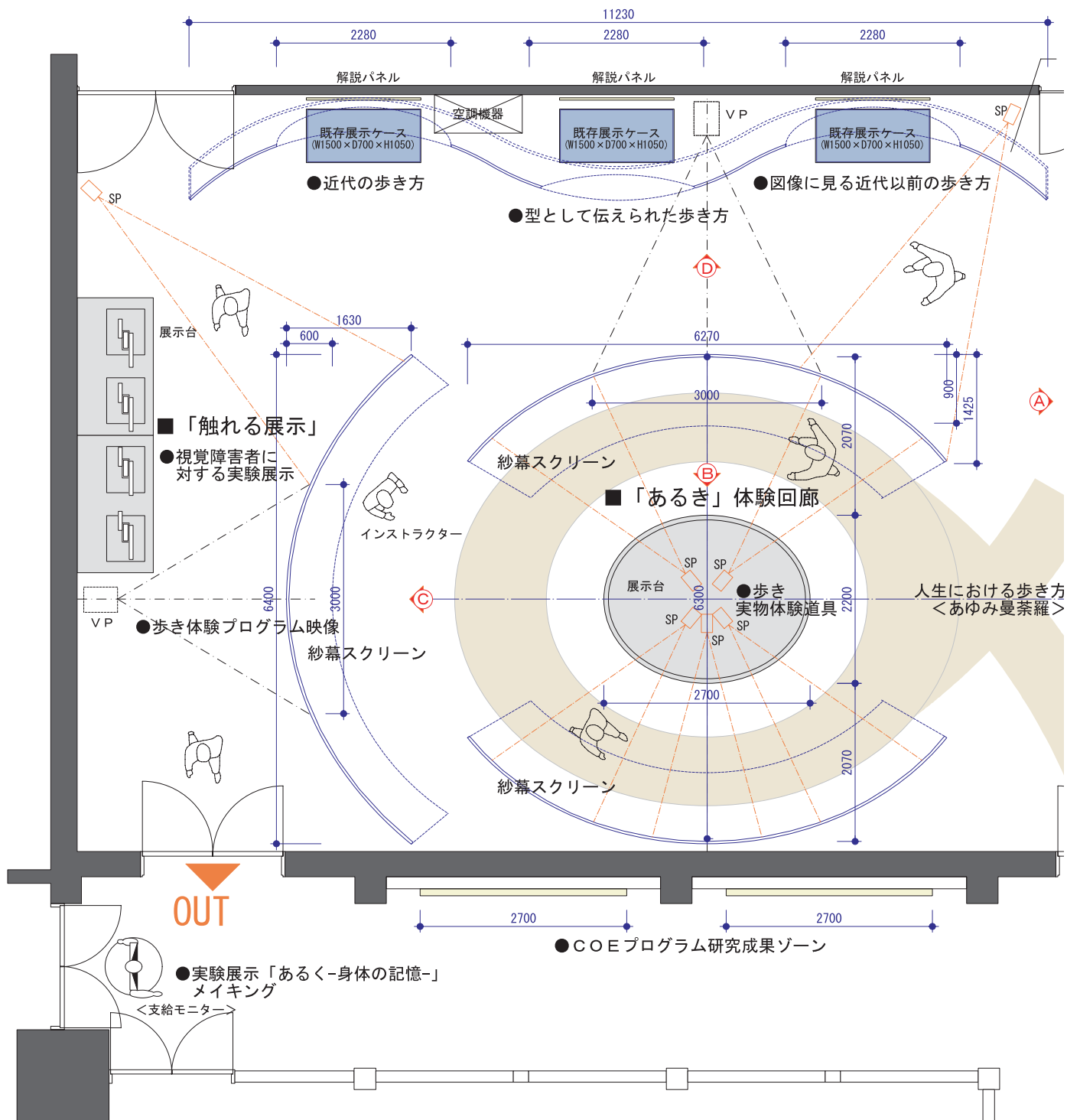
## カットアウト人形

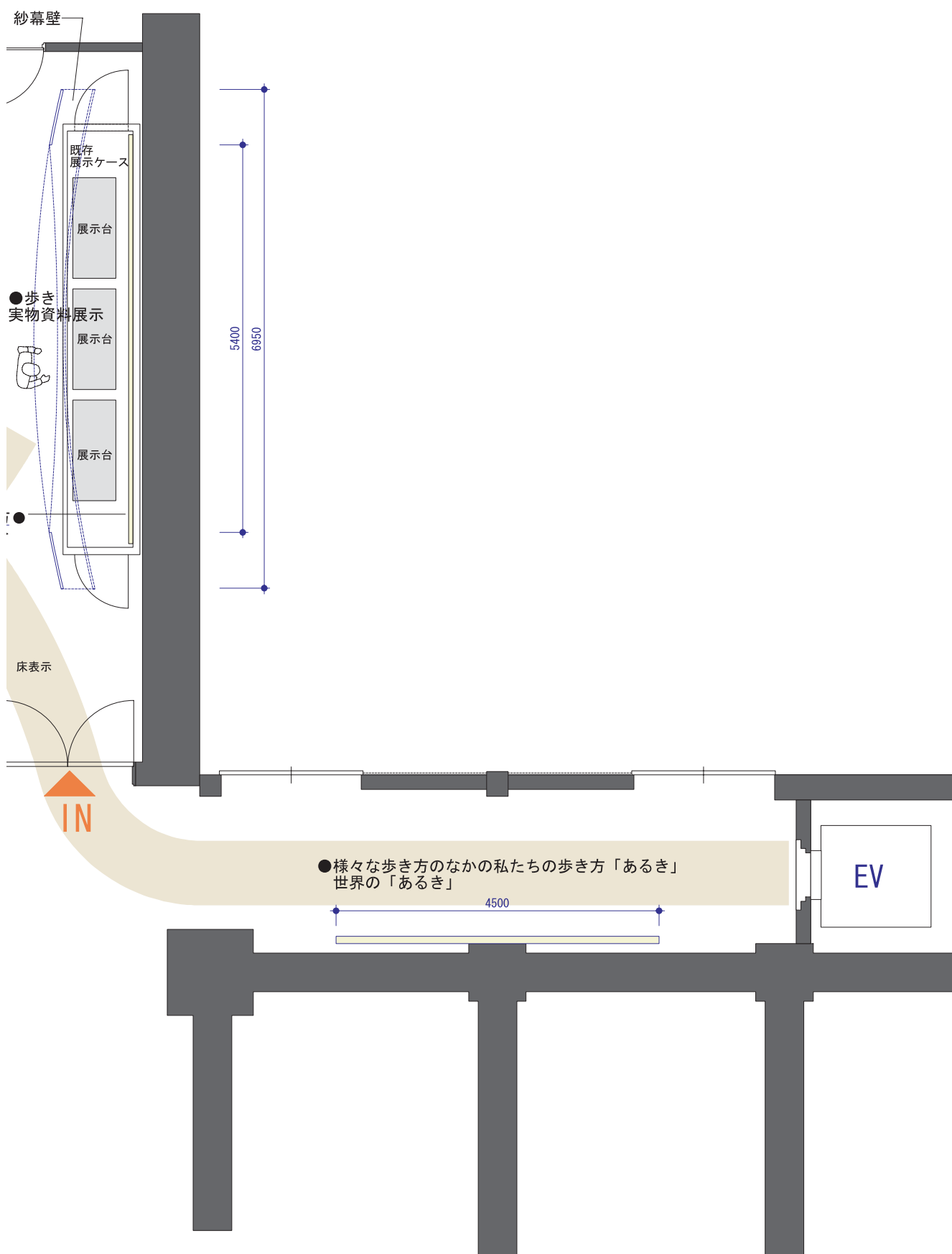


## 2 展示設計図

2-1 設計図 I

### 2-1-1 全体構想図

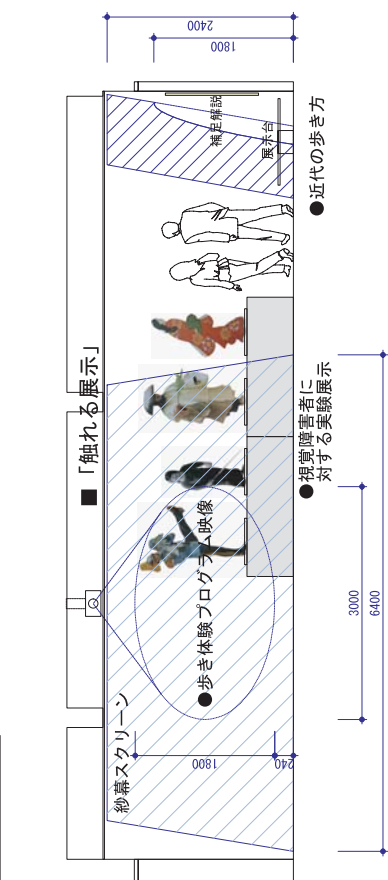




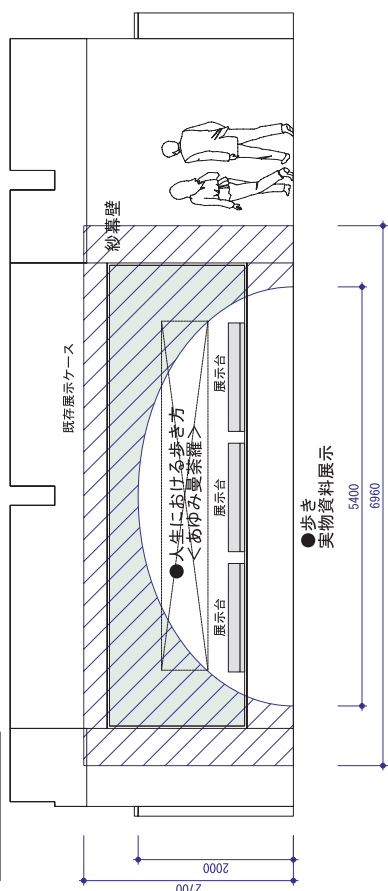
### 2-1-2 展開図

SCALE=1/60

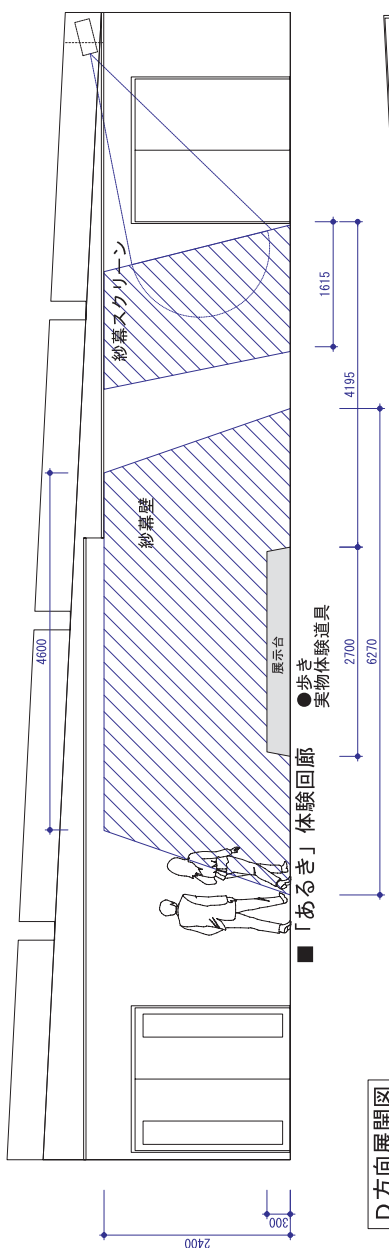
C方向展開図



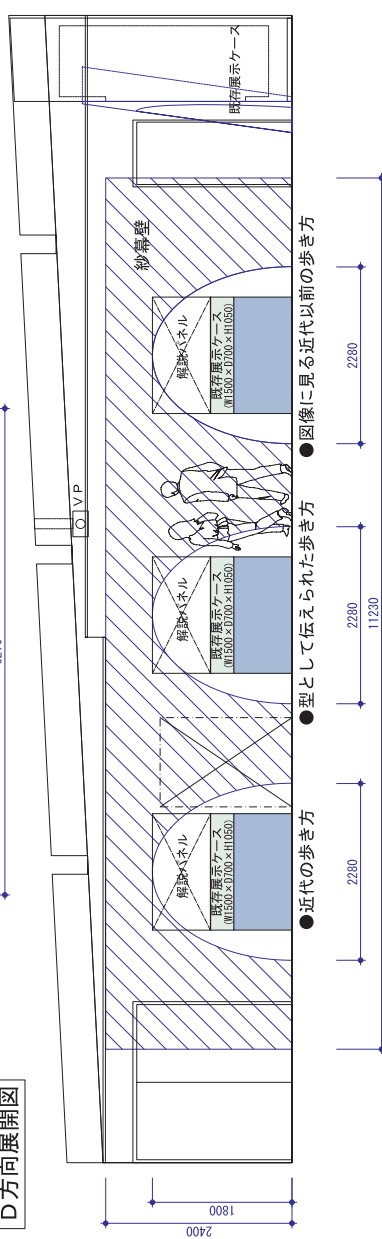
A 方向展開図



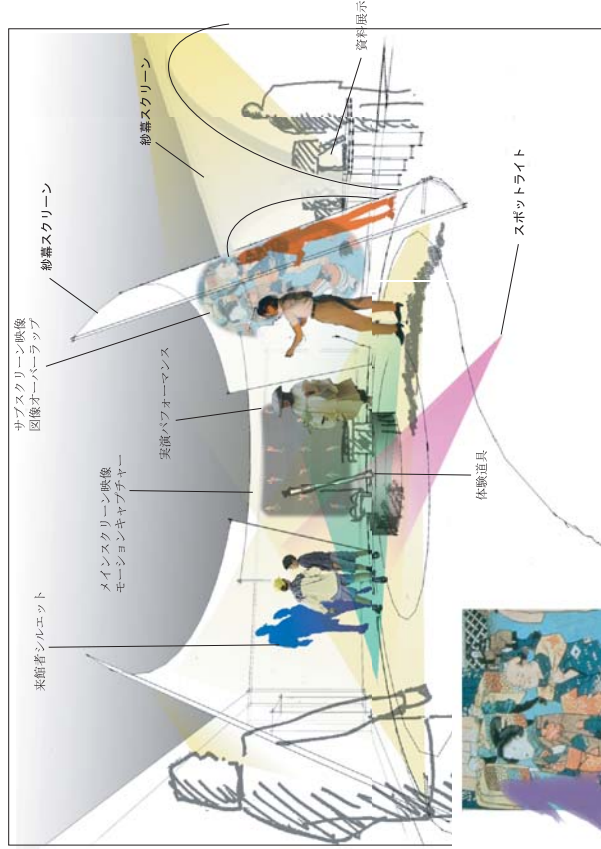
B 方向展開図



D方向展開図



体験回廊イメージ



■ プログラムメニュー例

- ・ 図像にみる近代以前の歩き方「あるき」  
ナンバであるいていたのか？  
裸足で走っていたのか？  
子どもは裸足であるいていたのか？  
草鞋・草履・足半・下駄の使い分けは？
- ・ 型として伝えられた歩き方「あるき」  
舞踏・能（摺り足）日本舞踊（ナンバ）  
武道・剣道（摺り足）
- ・ 視覚障害者の歩き方「あるき」  
手を引かれて歩く姿
- ・ 近代の歩き方「あるき」  
行進（軍隊・学校）  
行進ができない日本人  
靴になれない日本人



モーションキャプチャー

・ プロジェクターA

インストラクター実演指導

状況イメージ

環境音  
お祭り、行進曲、指導者  
下駄の音、雨ありの音など

スポット  
照明

演技者の影と図像がオーバーラップする

来館者演技

来館者シルエット

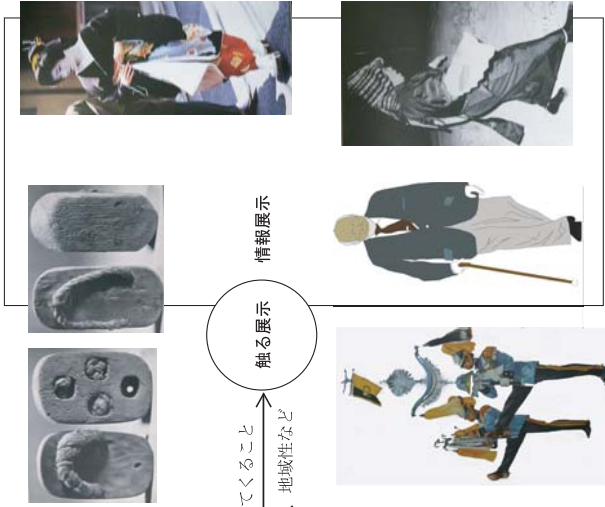
・ プロジェクターB

図像

資料から見えてくること  
類似性、多様性、地域性など

触る展示

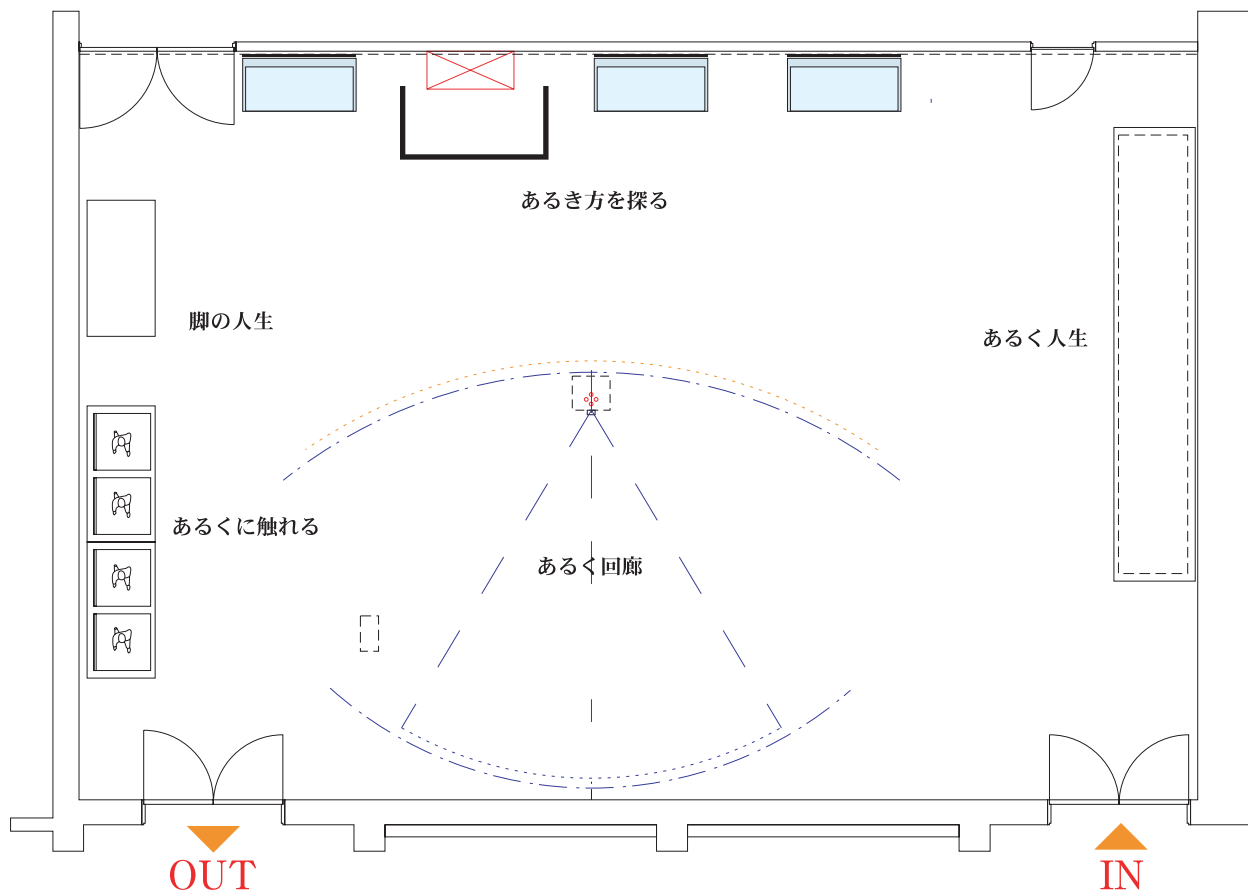
情報展示



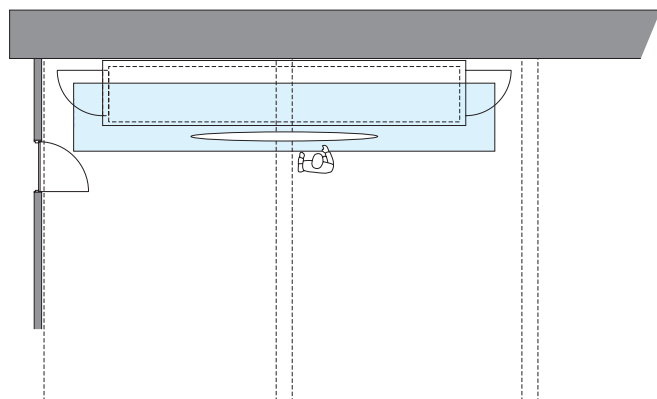
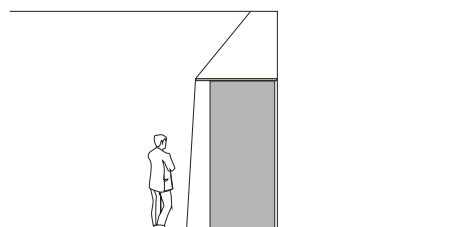
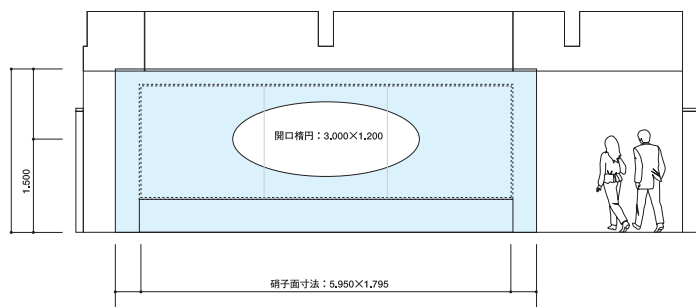
## 2 展示設計図

### 2-2 設計図Ⅱ

#### 2-2-1 展示場全図

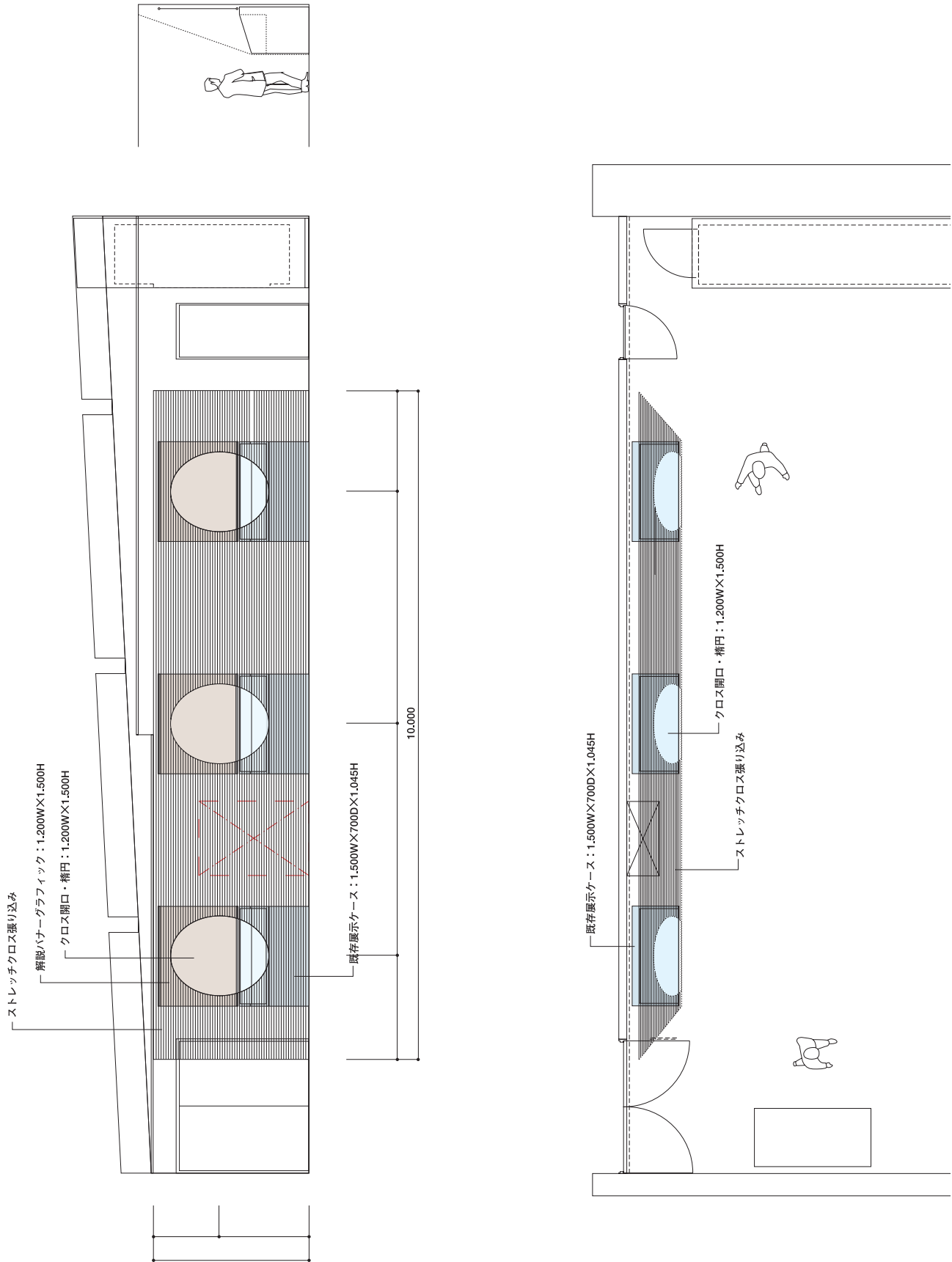


#### 2-2-2 「あるく人生」設計図





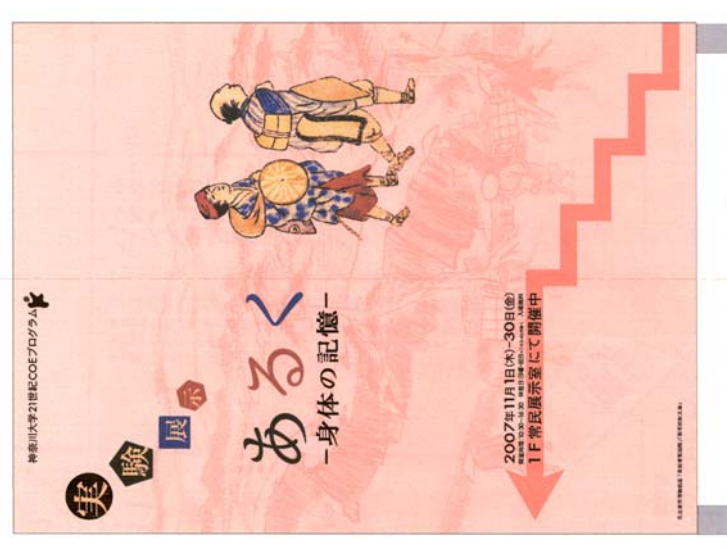
2-2-3 「かつてのあるき方を探る」設計図



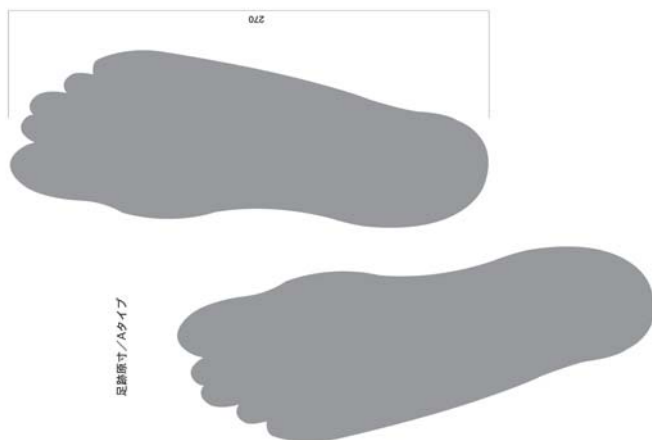
### 3 パネル・キャプション・印刷物

#### 3-1 パネル・キャプション

3-1-1 屋外案内板



3-1-2 足跡パターン



3-1-3 導入パネル

写真コラージュ案1  
W3,500 H1,100  
S=1/10



## ご挨拶

神奈川大学は、文部科学省が行った世界的な研究拠点を形成するための21世紀COEプログラムに2008年度に採択され、この5年間研究を推進して参りました。図像、身体技法、環境・空間を中心とした様々な非文学事象を資料化し、それを分析して、世界の人類文化研究に提供しようとするのが、私どものプログラムです。5年目となった本年度には、研究成果を様々な方法で発信しつつありますが、その発信方法の一つとして準備を進めて参りましたのが今回の実験展示「あるくー身体の記憶ー」です。

歩くというごく日常的な身体技法を取り上げ、様々な歩き方を図像資料や現在の実際の歩き方を整理検討し、そこに世代を超えて受け継がれた身体の記憶を発見する仕掛けとしての展示を実験的に組み立てました。展示空間も狭く、展示資料も多くありませんが、私たちの研究成果を、試みとしての展示に結実させる努力をいたしました。じっくりご覧いただき、歩くことについて自覚する機会にしたいだけでなく、共に、私どもの21世紀COEプログラムについて理解していただけることを願っています。

この展示の実施に際してご協力いただいた多くの方々にあつくお礼申し上げます。

2007年11月1日

神奈川大学 21世紀COEプログラム  
「人類文化研究のための非文学資料の体系化」拠点リーダー 福田 アジオ

### 「あるくー身体の記憶ー」の実験

実験展示「あるくー身体の記憶ー」は、私たちが日常生活において身に付けているあいさつなどの身体技法が、世代を超えて受け継がれてきたものであることを表現し、身体に記憶された非文学資料の豊かな歴史的 세계をメタセージする。

現在、街中で人々が歩いている様子をみると、実に様々な歩き方をしていることがわかる。そこには、年齢や性別などによる歩き方の差や、その状況に適した歩き方のパリエーションの違いがみられる。

さらには、それぞれの歩き方のくせというように個人差がみられる。また、服装や服装などによっても、歩き方に変化がみられる。

日常生活において最も一般的な行為の一つである歩くという行為をテーマとして、歩くことが世代を超えて私たちの身体に伝えられたものである可能性があることを、この展示によって実験してみたい。



3-1-6 「あるく回廊」 キャプション

300W×A227H

## あるく回廊

かつての私たちの歩き方を表す図像資料、映像資料をみてから、実際にかつての歩き方などを体験し、管段の歩き方との違いなどを実感してみよう。



3-1-7 「あるく人生」 キャプション

300×240

## あるく人生

### 熊野観心十界図（上半部図像）

熊野寺所蔵（東京都四谷区熊野神社）

熊野比呂臣と呼ばれる巫女が絵解きしたとされる熊野観心十界図の上半部の図像である。そこには大きく半円形の神が描かれ、いわゆる「人生の階段」と描かれた出生から死に至る人生が、各世代の歩く姿として描かれている。

熊野観心十界図の下半分には、地獄の様子が描かれている。



※ 図像枠内部分を印刷

3-1-8 「脚の人生」 キャプション

300W×227H

## 脚の人生

マツダ映画社所蔵・芸術映画社製作

昭和10年前後の製作と推測される無声映画。全篇の映像のほとんどが、歩く様子を映している特異な映画で、当時の繁華街や路地裏などで、様々な服装、履物の人たちが歩いている。また、歩くことに関連して、明治・大正・昭和初期の下駄や草履の変遷を解説している。

3-1-9 「あるくにさわる」 キャプション（点字）

150×200H

## あるくにさわる

人形を使ってかつての歩き方などの歩くフォルムを模写してみた。  
そのフォームをさわること、より立体的に歩くことによる身体のある方を感じ取っていただきたい。



かつてのありき方をさぐる

●あるくいと6記憶

[illegible]

## ● 図像資料のなかのあるく姿

かつての歩き方を探るために、中世から近世にかけての図像資料の中から歩いてゐる人の姿を探してみたところ、おおよそ二つの歩き方と、関連した一つの走り方を見出すことができた。


$$S=1/10,$$



## | W1.500 H1.200

かつてのあり方をさぐる



● あるきのなかの身体の記憶

いふは図説書裏から出出した糸の方の針程にならず  
腰を捲いて膝を曲げ、心算にあつてゐる者は一丸三  
半では書巻のなかにゆきないといふであらう。わが口。眼は  
ひきあつたなかにや。又を巻けりやに膝を多く曲げたか  
れをうけてゐるや。それより、あつてゐる書巻  
のうへは眼を半ばを捲いて、眼はひきあつたにまじり  
てゐるや。眼を半ばを捲いてゐるや。眼はひきあつたにまじり

4611 47 國體を以ては我々の如くは我々の如くは  
 我々の如くは我々の如くは我々の如くは  
 4811 48 國體を以ては我々の如くは我々の如くは  
 我々の如くは我々の如くは我々の如くは  
 4911 49 國體を以ては我々の如くは我々の如くは  
 我々の如くは我々の如くは我々の如くは  
 5011 50 國體を以ては我々の如くは我々の如くは  
 我々の如くは我々の如くは我々の如くは

一九三〇年頃の映像には、この歩き方に似た姿をみている人がみえた。その姿は職人風に肩をゆすつて歩くようにみえ、この歩き方の右足を出したときに右肩を出すことは、右足を引くときに右手を前に出して歩くのと同一身体の使い方だといふことがわかる。

解説パナー左

W1.500 H1.200

# かつてのあるき方をさぐる

## 型としてのあるく

### ● 滑り足

芸能や武道の世界では、滑り足という歩く型を伝えている。それぞれ滑り足の歩き方は、腰を落とす姿勢とし、足裏を全体で着地することを基本としている。

滑り足は、かつての私たちの歩き方を伝えたものであるという指摘がされているが、そのことを示すように、中世から近世の図像資料、1920年代の映像から共通して見出した腰を落として膝を曲げ、小股に歩いていく姿とも似ていることがわかる。

### ● 行進

近代に入り、洋服や靴の普及によって、かつての私たちの歩き方にも影響を与えられたと考えられる。そのなかでも、1885年から兵式体操として普及したとされる行進は、歩調を合わせて歩くことのない私たちの歩み方を合せて歩くことのない私たちの歩み方であった。

行進が行われた当初は、右足を出したときに左手をだす行進の歩き方ができずに、右足と左手を同時に出す、いわゆるナンバ歩きで行進にならなかった状況があったという。

近年、スポーツの世界で注目されている「ナンバ歩き」とは、武道の基本的な姿勢である右足と右足を同時に出す構えであるナンバで歩くことだとされている。右足を出し、右半身を前に出して歩く図像の姿と似ている点が多く指摘されている。



明治時代の学校で実施されたナンバ歩き(1905年)



S=1/10

### 3 パネル・キャプション・印刷物

#### 3-2 印刷物

3-2-2 案内葉書



3-2-1 ポスター







名古屋府立博物館「東洋館展覧会」『東洋館展覧会』

# あるく - 身体の記憶 -

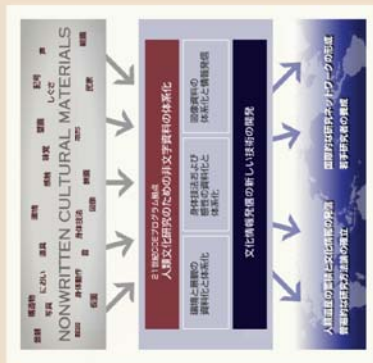
2007年11月1日(木) - 30日(金)  
開館時間: 10:30 - 16:30 休館日: 日曜・祝日・11月3・4・5日・入道祭日  
神奈川大学横浜キャンパス3号館 常民参事室

## 人類文化研究のための非文字資料の体系化

神奈川大学21世紀COEプログラム

2002年度から文部科学省が開始した「21世紀COEプログラム」は、世界的な研究拠点の構築するための大学支援策であり、大学院博士課程を持つ多くの大学がそれに採択されていることを目指して取り組んできた。私たちの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、2003年度に年度・複合・新領域の分野で多くの研究者に当たっては、研究課題にかかわる学内外の多くの研究者に参加を要請し、共に研究に従事してもらい、目的を達成することにした。

今までの文化研究では文字に記述された事象に専ら関心が集中してきた。しかし、文字に表現されない人間の概念・知識・行為ははるかに幅広く、質量ともに大きい。それは文字で表現された事象とは比較にならない。私たちの事業は、これらのなかから①図像、②身体技法、③環境・景観の三つに絞って、それぞれの事象について資料化する方法を開発し、その結果として資料を蓄積し、蓄積した資料を分析して発信することを目的としたものである。その研究構想を示せば、以下の通りである。



研究成果は、すでに各種の刊行物やホームページで順次公開してきましたが、最終年度になる本年度には、その最終成果をデータベースや各種情報のウェブ上での発信という方法で世に問い、多くの研究成果報告書として刊行することとした。今回の実験展示「あるく-身体の記憶-」は、私たちの研究成果を広く発信する方法として構築され、実施するものである。

神奈川大学21世紀COEプログラム  
〒221-8686 横浜市中区六角橋3-27-1  
TEL 045-481-5661 URL <http://www.himaji.jp>

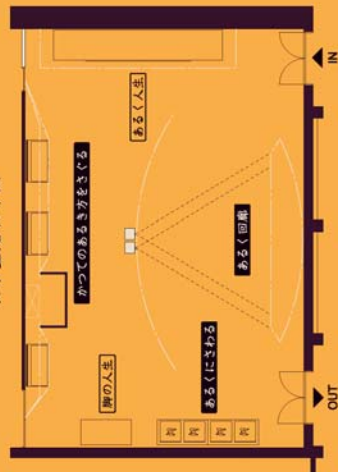
## 「あるく-身体の記憶-」の実験

実験展示「あるく-身体の記憶-」は、私たちが日常生活において身に付けているあいさつなどの身体技法が、世代を超えて受け継がれてきたものであることを表現し、身体に記憶された非文字資料の豊かな歴史的世界をメッセージする。

現在、街中で人々が歩いている様子を見ると、実に様々な歩き方をしていることがわかる。そこには、年齢や性別などによる歩き方の差や、その状況に応じた歩き方のバリエーションの違いがみられる。さらには、履物や服装などによっても、歩き方に違いがみられる。

日常生活において最も一般的な行為の一つである歩くという行為をテーマとして、歩くことが世代を超えて私たちの身体に伝えられたものである可能性を、この展示によって実験してみたい。

展示室見取り図



**あるく人生**  
人形を動かして歩くの歩き方を体験し、その歩き方を再現することによって、より具体的な歩き方を体験し、これによって歩き方の違いを感じてもらう。

**あるく回廊**  
かつての私たちの歩き方を再現し、その歩き方を体験することによって、より具体的な歩き方を体験し、これによって歩き方の違いを感じてもらう。

**あるく回廊**  
かつての私たちの歩き方を再現し、その歩き方を体験することによって、より具体的な歩き方を体験し、これによって歩き方の違いを感じてもらう。

**かつての歩き方をさぐる**  
かつての歩き方をさぐる。かつての歩き方を再現し、その歩き方を体験することによって、より具体的な歩き方を体験し、これによって歩き方の違いを感じてもらう。

協力 (資料提供) 神奈川大学 各学系

かつてのあるき方をさぐる

國立臺灣大學圖書館藏



1、オープニング



身体の記憶の発見

2、あるく記憶



神奈川大学 21 世紀 COE 実験展示 「あるく-身体の記憶-」 展示映像

「身体の記憶の発見」

コメンテ台本 (最終稿) 2008/02/19



2



3

### 3、かつての私たちの歩き方を探る

かつての私たちの歩き方の特徴

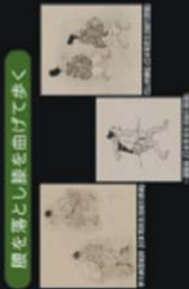


かつての私たちの歩き方には  
いくつかの特徴がある



かつての私たちの歩き方には  
いくつかの特徴がある

○腰を落とし膝を曲げて歩く



腰を落とし膝を曲げたときの歩き方は

5



フィルム映像が  
およそ70年から80年前の歩き方を  
伝えているように



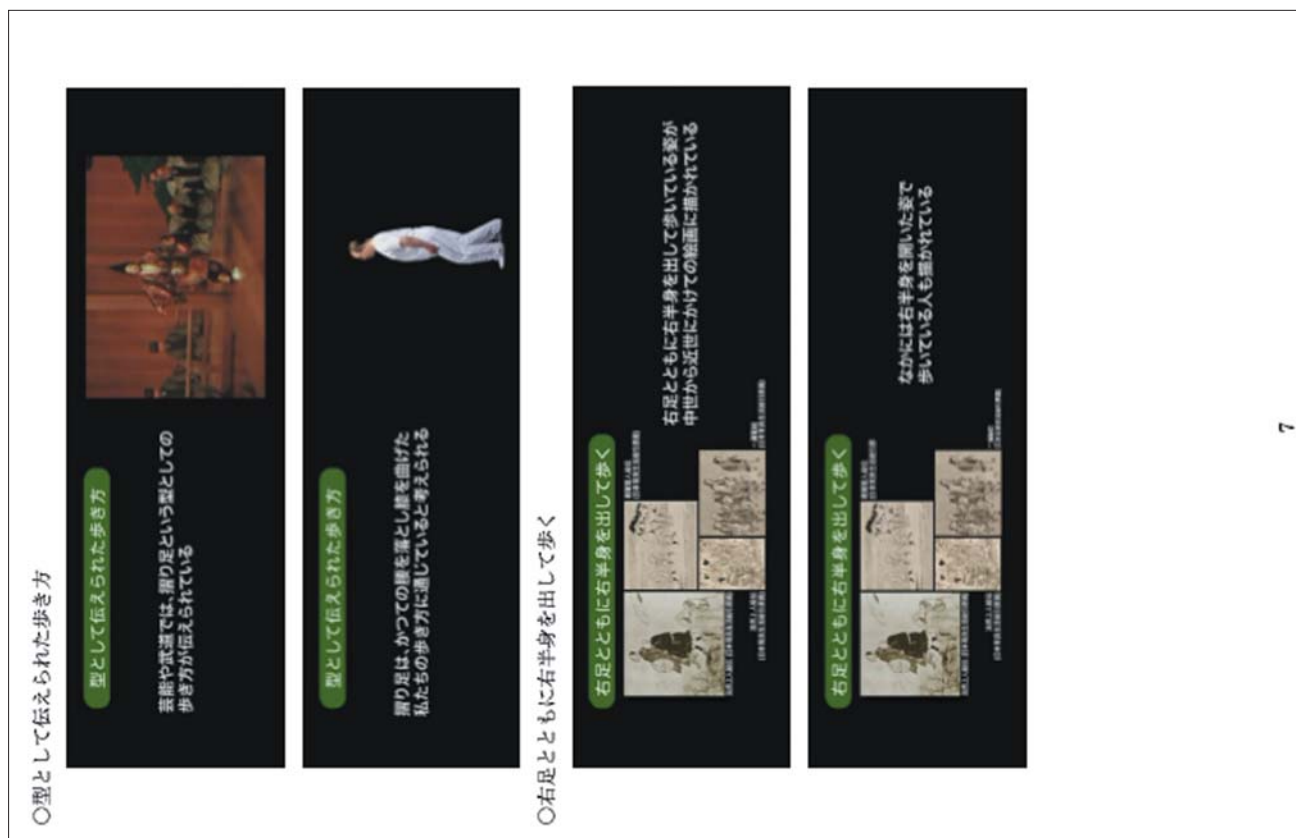
私たちの身体にも、当時の歩き方が  
記憶されているのかもしれない



4



6



7



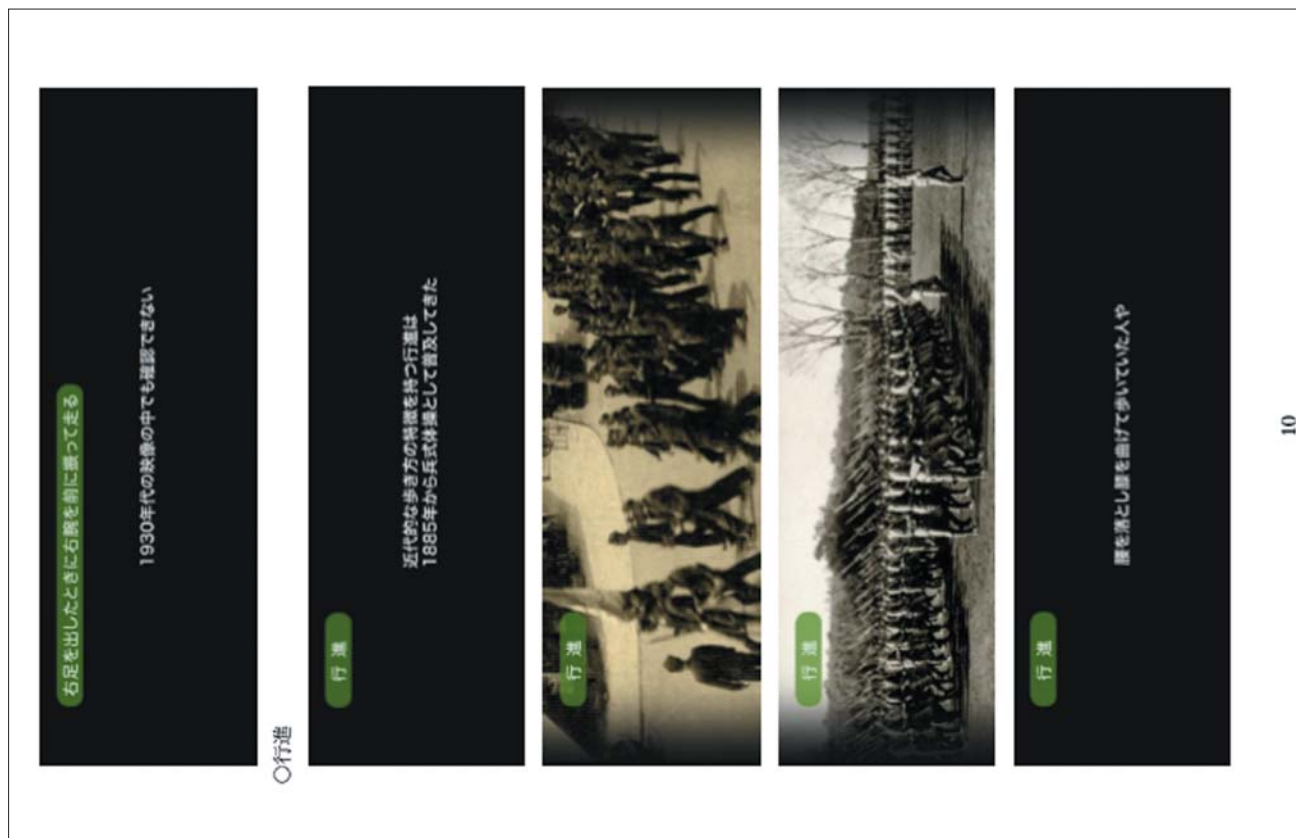
9



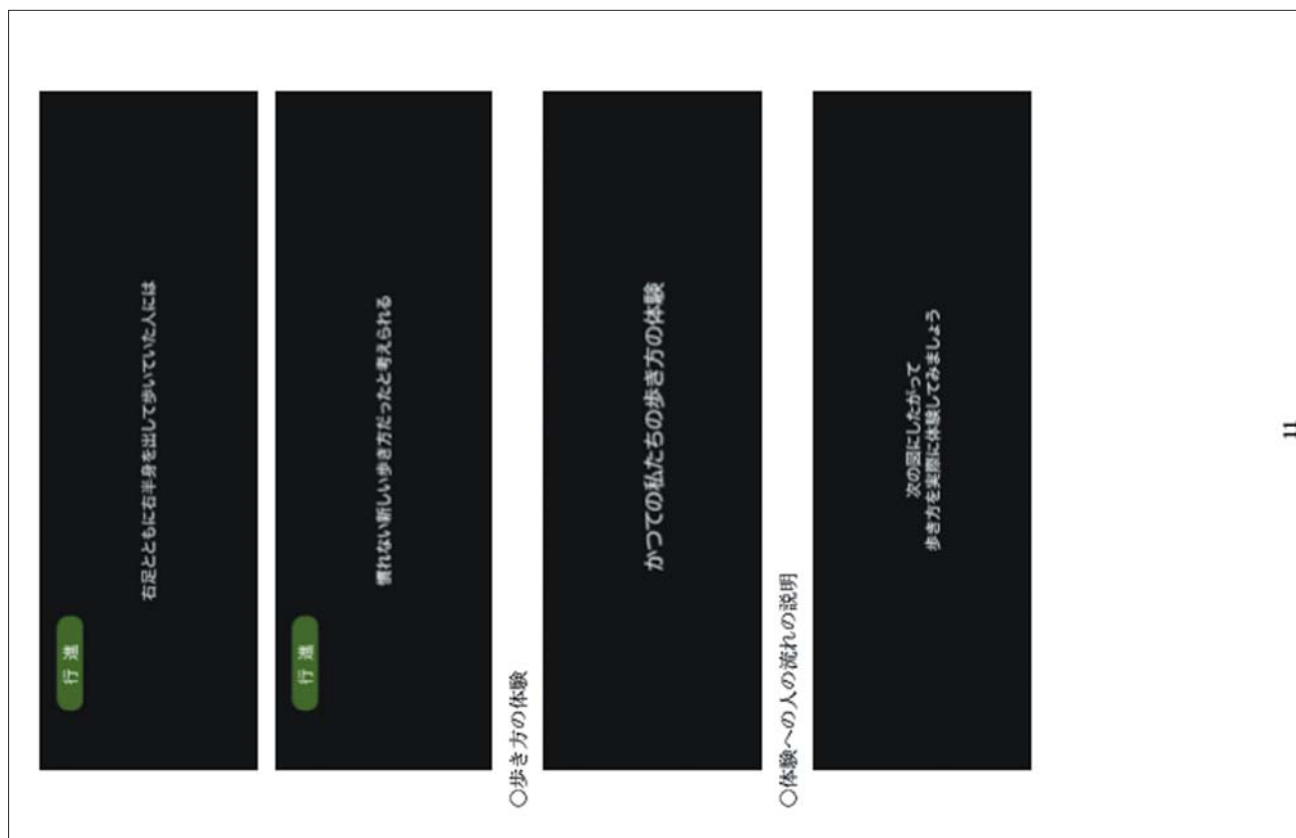
8

○右足を出したときに右腕を前に振って走る





10

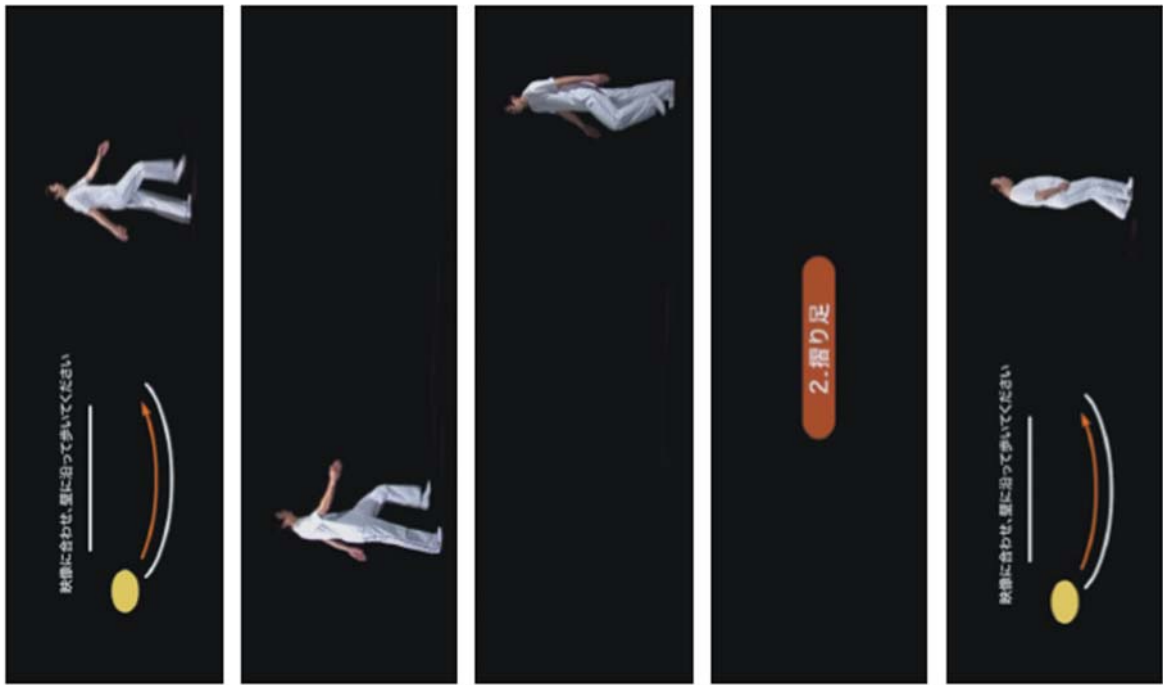


11



○体験

12



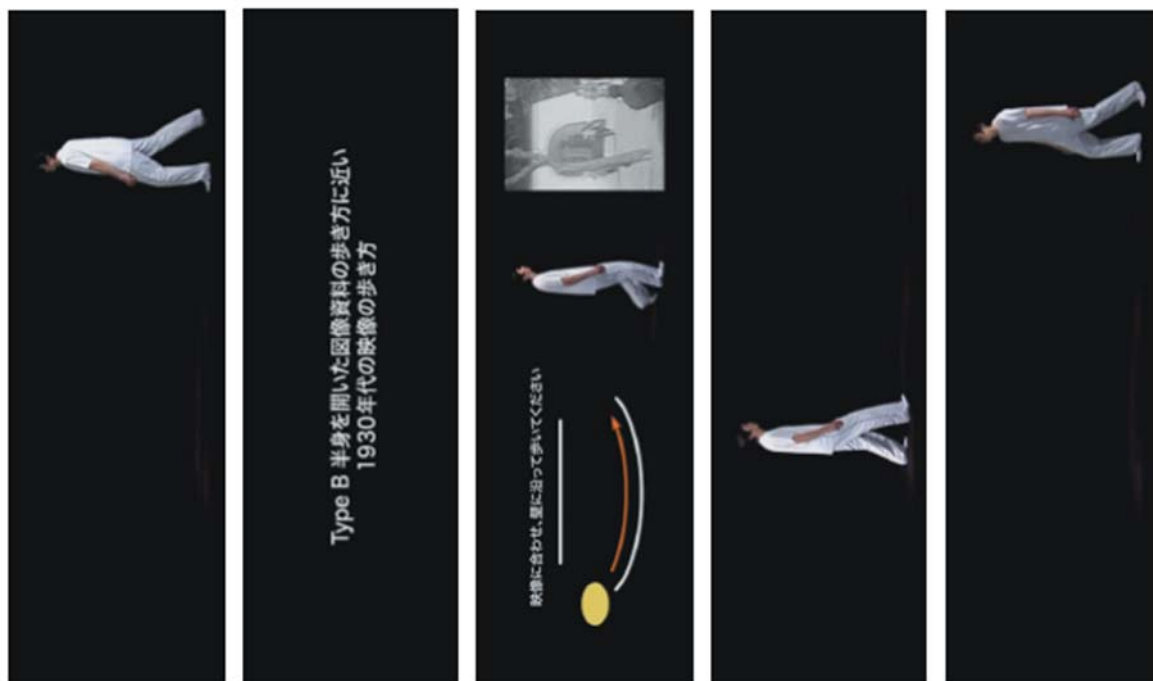
13

14



15





## 5 記録写真

### 5-1 展示をつくる



映像「身体の記憶の発見」の撮影



映像「身体の記憶の発見」の撮影



「あるく回廊」紗幕の組立



「あるく回廊」の映像と照明の調整



入口パネルの位置決め



「あるく人生」製作途中



5-2 展示へ誘う



大学正面の垂れ幕



展示場入口の看板



建物入口から展示場入口に続く足跡パターン



エレベーター前のパネル



エレベーターから展示場入口まで続く足跡パターン

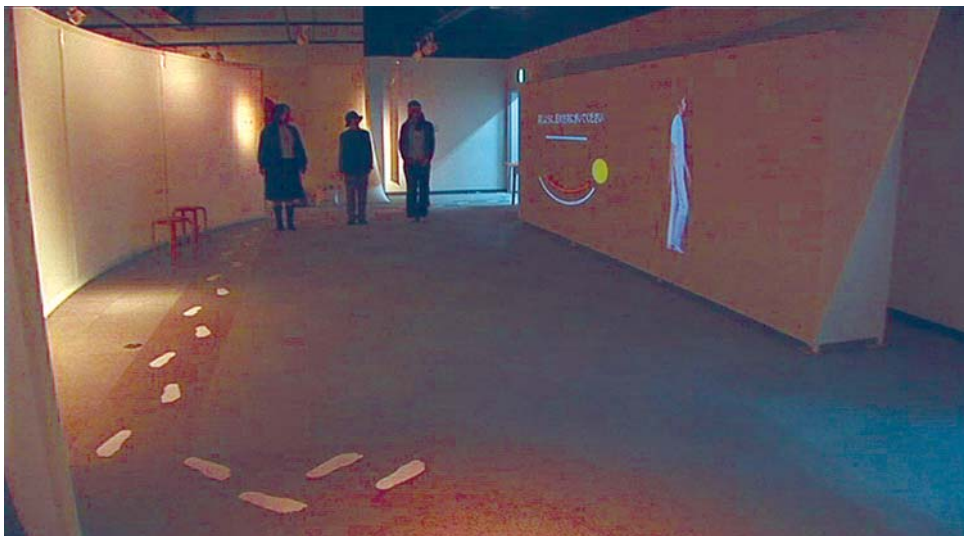


入口のタイトルパネルと「あるく回廊」



## 5 記録写真

### 5-3 展示「あるく回廊」「かつてのあるき方をさぐる」



「あるく回廊」で歩き方を体験する



「あるく回廊」で映像を見る



「かつてのあるき方をさぐる」



紗幕スクリーンの中のパネルと展示ケース

5-4 展示「あるく人生」「あるくにさわる」「はきかえて歩いてみよう」



「あるく人生」



「脚の人生」の上映



「あるくにさわる」



「あるくにさわる」



「はきかえて歩いてみよう」



「はきかえて歩いてみよう」一本歯で歩く